

明石城

明石城は戦争を知らない城である。関が原も終わった江戸時代の初めに、西国の防備のために、歴代の徳川の譜代大名によって建設が進められたが、天守は築かれず、本丸の四隅の三重の櫓やぐらと城主の御殿が築かれた。J Rの明石駅の山側の公園に、美しい白壁で眺められるのは、現存する2基の櫓やぐらである。



最初に明石城を建設したのは、1617年、信州松本城主から明石藩主となった小笠原忠真である。忠真は明石城の西方、明石川河口西岸にあった船上城に入城したが、譜代大名10万石の居城として城郭を建設するよう、2代将軍徳川秀忠より築城命令され、人丸山（赤松山）に明石城を築城した。人丸山には大きな池があり城の防備に役立つと考えられたからである。同時に城下の町割りも行なったが、これには当時小笠原氏の客分だった宮本武蔵が指導したとの記載が、小笠原氏の古記録に残されている。

苦心して明石城を築城した小笠原忠真ただかねは、1632年豊前國小倉藩（小倉城）に転封となり、その後、越前から松平直明なおあきらが6万石まで入場するまでの約50年間、明石城の主はほぼ10年毎に入れ替わる。

1650年に丹波篠山城より7万石で入城した松平忠国は名君として知られ、林崎掘割の用水路の設置、海岸の防風林の造成、そして新田の開発に努めた。文化人でもあり城内十景を選んで、この時に「喜春城きしゅんじょう」の名を付けた。

反対に1679年、大和の郡山城から転封した本多政利は領内を収める事ができず、僅か3年後、苛政を責められ陸奥国岩瀬藩に1万石に減知転封となった。

1682年（天和2年）に、越前から松平忠直が6万石で入城、以後明治維新まで10代、189年間親藩として松平氏の居城となった。

城郭は本丸を中心に配し、東側に二の丸、その東に東の丸が配され、南側に三の丸、西側には稲荷郭が設けられた。

西側は明石川を自然の外堀とし、南側は運河を掘って港を兼ねた外堀（現在の明石港）とした。北側は鴻の池（剛の池）と自然林、谷筋で防備を固めた。

天守は無く、本丸の四隅に巽櫓、たつみやぐら 坤櫓、ひつじさるやぐら 乾櫓、いぬいやぐら 艮櫓、うしとらやぐら の4基の三重櫓が設けられていた。現存するのは、そのうちの南側の2棟すなわち巽櫓（南東側）と、坤櫓（南西側）で、『日本城郭大系』によると「坤櫓が天守閣の代用となっている」としている。

巽櫓・坤櫓は国の重要文化財に指定され、城跡は国の史跡に指定されている。

藩主の居館は本丸にあり3階建ての立派な建物で、部屋には名前や画風から長谷川等伯の弟子と考えられる長谷川等仁の手になる、襖絵「花鳥山水図」が飾られていた。現存するのは、晩冬から春の前兆を描いた二曲屏風六隻・全12面だが、本来は夏から秋にかけての花鳥山水図が対で存在し、四季花鳥図を構成していたものと推定される。この居館は1631年（寛永8年）に失火し焼失してしまっただが、襖絵の一部は遺物として残り、大坂の蔵屋敷に運び出されて幕末まで伝えられた。

（参考資料 インターネット、明石の観光パンフレット）

